

基金ホームページURL ● <http://www.jkcf.or.jp>

発行 財団法人 日韓文化交流基金
〒105-0001 東京都港区虎ノ門5丁目12番1号
虎ノ門ワイコービル3F
電話 03-5472-4323 FAX 03-5472-4326
発行日 2008年1月4日

日韓文化交流会議 第8回全体会議開催

日韓文化交流会議は、2007年9月15日、ソウル（新羅ホテル）にて第8回全体会議を開催しました。



会議冒頭、韓国側の金容雲座長は、「この会議が回を重ねる間、韓国における日本大衆文化の開放や、日本における韓流ブーム、年間500万人もの人々の往来など、日韓関係は予想を超える進展をみせてきた、今後は『交流』を超えて『合流』、一緒に何かを作り出していくことが期待される」と述べました。続いて日本側の平山座長は「この会議において行ってきた多くの提言が実現されてきた。これまでの活動を振り返りつつ、今後を見据えた話し合いをしたい」と述べました。

続いて主題報告が行われ、日本側では小此木政夫副座長と小針進教授（静岡県立大学）が、韓国側では柳鈞副座長と金泳徳研究員（韓国放送映像産業振興院）が、それぞれ共同で過去10年間の日韓文化交流の動きを回顧すると共に、今後目指すべき方向性についての提言を行いました。これらの提言を受けて、下記の意見の他、両国の委員から多数の意見が提示されました。

(1) 文化の中核となる思想、芸術に

対する研究や理解が深まってこそ、相手国に対する尊敬の念も深まっていくものであり、本会議においても一般市民レベルの交流だけでなく、学術レベルでの交流促進を訴えていくことが重要である。

(2) 日韓両国国民、特に若者の生活感覚は急速に同質化していきつつあり、そのような点から日韓文化交流の未来について楽観している。相手国に関心を持たない人に関心を持たせることが課題であり、地道な努力が必要である。

(3) 両国内の「反日、嫌韓」関連の言説を分析してみると、韓国の場合は「森を見て木を見ず」、日本の場合は「木を見て森を見ない」傾向があり、論争において「座標のずれ」が存在しているようである。感情的な部分をろ過した上で、根拠を持ち、意味のある「嫌韓」論調を韓国に紹介し、同じく根拠と意味のある「反日」論調を日本に紹介してはどうか。相互が客観的な指摘を受け入れれば、日韓関係もより成熟したものとなるであろう。

日韓文化交流会議メンバー

日本側（座長、副座長以外は五十音順、敬称略）

- | | |
|---------------|-----------------------|
| 1. 平山郁夫（座長） | 日本画家 |
| 2. 小此木政夫（副座長） | 慶應義塾大学法学部教授 |
| 3. 松尾修吾（副座長） | 国際交流基金
日本語国際センター所長 |
| 4. 饗庭孝典 | 東アジア近代史学会副会長 |
| 5. 亞洲奈みづほ | 作家 |
| 6. 新井 満 | 作家 |
| 7. 千 玄室 | 前裏千家家元 |
| 8. 芳賀 徹 | 京都造形芸術大学学長 |
| 9. 広中平祐 | 財団法人数理科学振興会理事長 |
| 10. 黛まどか | 俳人 |
| 11. 水谷幸正 | 浄土宗宗務総長 |

韓国側（座長、副座長以外は가나다順、敬称略）

- | | |
|-------------|--------------------|
| 1. 金容雲（座長） | 数学文化研究所所長 |
| 2. 柳 鈞（副座長） | 韓国放送映像産業振興院院長 |
| 3. 鄭求宗（副座長） | 東亜ドットコム代表理事 |
| 4. 金然鐘 | 秋渓芸術大学文化産業大学院長 |
| 5. 都正一 | 民族文学参加会議諮問委員 |
| 6. 李柱益 | ポラム映画社代表理事 |
| 7. 李惠慶 | ソウル女性映画祭執行委員長 |
| 8. 林英雄 | 劇団「サヌリム」代表 |
| 9. 林貞希 | (社) 明るい青少年支援センター代表 |
| 10. 千柄泰 | 釜山大学校法科大学教授 |
| 11. 崔成泓 | 元外交通商部長官 |

見て、聞いて、感じた日本、韓国—日韓中高生交流

日韓文化交流基金では、日韓の中高生同士の交流を促進し、国民的な友好協力関係の基礎構築を目的として、1999年度より日韓中高生交流を実施しています。2007年度からは日本政府の「21世紀東アジア青少年大交流計画」の一環として再編成され、韓国からの招聘人数を倍増するなど、その事業規模を拡大しています。今年度を実施した訪日・訪韓研修団の感想から、両国の中高生が相手国をどのように感じたのかをご紹介します。

訪日

九州国立博物館

● 資料がとて多量と思った。韓国でも見ることができそうなものがあるのは、韓半島（朝鮮半島）とつながりがあるということだからうれしく思う。(高校生女子)

太宰府天満宮

● 日本の神社には神様がいろいろいることにびっくりした。(高校生女子)
● おみくじは面白いと思う。日本人は韓国人より見えない存在に思いをはせることが多いのではないかと思う。(高校生男子)

吉野ヶ里遺跡



● 韓国の博物館で見ることができるものとよく似ていた。ルーツは韓半島にあると思う。(高校生男子)

ヤクルト佐賀工場

● ヤクルトの容器の一部を水の浄化に役立てるという環境に配慮した点はとてもいいことだった。(高校生女子)
● 韓国のものだとばかり思っていた。日本の企業であることにびっくりした。(高校生男子)

大浦天主堂



● キリスト教関連の施設が国宝であるとは意外だった。迫害されたキリシタンの追悼施設としての聖堂という点も印象的だった。(高校生男子)
● 厳肅な雰囲気印象的だった。(高校生女子)

原爆資料館

● 日本人と同じ気持ちでは見ることができないが、事実を客観的に知る上では役に立った。(高校生男子)
● 原爆の威力について知ることができた。(高校生女子)

柳川



● 人が暮らす町の中に、昔の町並みが保存され、調和しているのは、とてもいいことだと思った。(高校生男子)
● 船着場の人々、行きかう観光客、みんな笑顔を見せてくれ、日本らしさを感じた。(高校生女子)

日産九州工場



● 客の細かい注文を受けてから合わせて生産するという「注文生産」という点がすごいと思った。(高校生男子)
● 環境に配慮して、工場内でリサイクルできる点は見習うべきだと思う。(高校生女子)

北九州エコタウンセンター



● 体系的にリサイクルに取り組み、それを市場に流通させようとする仕組みはすごいと思った。(高校生女子)

学校訪問



● 日本では活発な部活動と卒業後の進路が両立されている点がうらやましいと思った。(高校生男子)
● 積極的に話しかけてくれて緊張せずに済んだ。短い時間で思った以上に仲良くなれたと思う。(高校生男子)
● 日本語が全くできないので相当緊張したが、やさしい生徒が多かったので助けられた気がする。(高校生女子)
● 英語の授業に入ったが、相手は照れくさそうなので活発に会話できず、少し戸惑ったが、最後は打ち解けられた。(高校生女子)

雲仙岳災害記念館

● 韓国にはない資料館。災害と共に暮らす日本人の苦勞と知恵を感じた。(高校生男子)

阿蘇山

● 活火山があるということ自体がすごい、怖い。(高校生男子)

訪韓

伝統文化体験（テコンドー）



●最初は簡単かと思ったが、動きは思いのほか難しかった。でも楽しかった。(中学生男子)

伝統文化体験（韓服）



●日本とは全く違う衣装。派手だけど色使いが特徴的で奥深いと思った。(中学生女子)

●照れくさかった。かぶり物が重かった。(中学生男子)

●色が鮮やかで刺繍がきれいでした。みんなで記念写真をとりました。(高校生女子)

中学校訪問



●言葉が通じなくても、相手が何を言っているか分かったし、自分が伝えたいことも相手に分かってくれたと思う。日本人は英語をもっとできるようにしてから訪問したほうがよい。韓国の生徒はほとんど英語で話しかけてくれるほど上手だった。(中学生男子)

●みんな日本人にもすごく興味を持っていて、有名人になった気分でした。(中学生女子)

オドゥ山統一展望台



●兵隊さんがいっぱいいたらどうしようと、正直、行く前は怖かった。行ってみたら何ともなくて安心した。どうすれば

早く南北統一できるのかなってバスの中でいろいろ考えたが、まだ自分には分からない。もっと勉強が必要だと思い知らされた。(高校生女子)

●もっと遠い国だと思っていたが、高台から眺められるほど近くにいることが不思議だった。(中学生女子)

●川一つ隔てて、もし自分の故郷なのに行けなといわれたらきっと悲しいと思う。(中学生女子)

韓国民俗村



●建物の造りがわかって面白かった。オンドルの仕組みが興味深かった。(中学生女子)

●「チャングムの誓い」の世界みただった。(中学生女子)

農心亀尾工場



●ラーメン好きなので、とても楽しみだった工場見学。和歌山でもよく目にする「辛ラーメン」が農心で作られていると知り驚きました。(高校生女子)

●麺を揚げているとは知らなかった。整然と生地から麺が作られている様子には不思議な感じがした。(中学生女子)

釜山

●初めての飛行機で少し酔ったけど、韓国に着くとハンゲルの看板に興味があり、酔ったことなどすっかり忘れしました。(高校生女子)

慶州

●日本でも見られそうなものがあったが、それだけ文化が繋がっていたということを実感した。(中学生男子)

●慶州の有名な遺跡を見学し、この国の技術の高さに感嘆しました。遠足に来ていた韓国の小学生に握手を求められたり、声をかけられたりしてうれしかった。(高校生女子)

日程

	訪日	訪韓
1日目	福岡着 太宰府天満宮、九州国立博物館見学	釜山着
2日目	日産九州工場、北九州エコタウンセンター見学	慶州見学（石窟庵、天馬塚など）
3日目	吉野ヶ里遺跡、ヤクルト佐賀工場見学 柳川舟下り体験	農心亀尾工場見学 東大邱→ソウル（KTX） Nソウルタワー見学
4日目	学校訪問	伝統文化体験（韓服、テコンドー） 韓国民俗村、 水原華城見学
5日目	阿蘇山、草千里、雲仙岳災害記念館見学	学校訪問、自由研修
6日目	大浦天主堂、グラバー園、出島、原爆資料館、 平和公園見学	オドゥ山統一展望台、景福宮見学 芸術鑑賞
7日目	帰国	帰国

日韓文化交流基金懇談会 講演「朝鮮医薬と徳川吉宗」

慶應義塾大学教授 田代和生

9月28日(金)に日韓文化交流基金懇談会を開催し、田代和生先生の講演「朝鮮医薬と徳川吉宗」を行いました



徳川吉宗という日本人になじみの深い将軍の時代は、先駆的な経済政策を行うなど、江戸時代のひとつの節目であるとともに、近代につながっているといえます。そしてその仕事は、意外にも朝鮮と非常に深い係わり合いがありました。そのキーワードは、薬です。

吉宗の願い

「薬好き将軍」というのが徳川家に歴代生まれています。代表的なのが徳川家康で、将軍自ら薬を調合して家臣に飲ませたという記録がよく出てきます。吉宗や、その祖父頼宣もまた大変な薬好きです。薬園を作って中国や朝鮮の薬材となる植物を栽培するほか、吉宗は当時の薬学である「本草学」の専門家を民間から実力試験で登用し、優秀な者には御典医を任せています。

そんな将軍吉宗がとても我慢できなかったことは、当時中心的な薬材だった朝鮮人参が非常に高値で売られていることでした。そのころの日本は「人参ブーム」で、朝鮮から大量の人参が輸入され、対馬藩直営の江戸の「人参

座」で商われていました。その値段は1斤(600g)で、農家の出稼ぎの1年の収入の10倍以上に相当するほどの高値でした。背景には、庶民にまで人参の多用現象が浸透していたことがありました。日本の医師が怠慢で研究不熱心で、どんな病気でも人参を勧めてしまうのです。このため、娘の身売り話が出たり、人型に近い人参ほど悪気を吸い取ってくれるとあって神棚に上げて大事にしながらスライスして煎じて飲むといったように、人参自体が神格化していました。

医学先進国朝鮮

近世に、民間人まで突然人参を多用するようになった背景には、朝鮮医学の影響がありました。朝鮮の医学は中国の医学と区別なく日本に入ってきて、「唐薬」といわれていましたが、源をたどると朝鮮から入ってきたものが多いことがわかります。

高麗末期ごろから朝鮮では医学が非常に盛んになっていきます。単に中国の医学を写し取るのではなく、それを消化吸收した上で独自の学問を形成していったのが朝鮮医学です。15世紀初めの世宗大王の時代に朝鮮医学は全盛期を迎え、制度的にも充実していきます。朝鮮時代を通じて、200種類以上の独自の医学書が刊行され、16世紀までには朝鮮医学の基本が完成していたといわれています。

文禄・慶長の役の略奪品の中で、印刷が非常に優れていた朝鮮の書籍は日本でとても尊重されました。やがてそ

の中に多くの医学書があることが判明し、日本の有力者のレベルで朝鮮の進んだ医学が知られるようになります。

江戸時代には朝鮮との貿易を行う対馬藩に対し、有力者からたびたび医学書の要求が出されます。その注文書籍の中に、やがて『東医宝鑑』が現れ出します。『東医宝鑑』は、現在も韓国医学で使用される医学書で、朝鮮医学の最高峰といわれるものです。『東医宝鑑』は、その前の時代の『郷薬集成方』や『医林撮要』の流れを引き、その核心は朝鮮の「郷薬」の代名詞である人参の多用でした。しかし人参は即効性があるかわりに体力のない人にはきつすぎるといわれ、それらの医学書が書かれた時代には必ずしも薬の主流ではありませんでした。『東医宝鑑』を編纂した許浚は国王宣祖の時代の御典医ですが、宣祖が亡くなったとき、人参の多用で国王が亡くなったと反対派から非難され流罪になります。この流罪中に『東医宝鑑』の編纂を進め、17世紀の初めに完成しました。

『東医宝鑑』は1718年に、半ば強制的に対馬から召し上げられたかたちで将軍吉宗に献上されます。そこに1400種類もの薬材の調合と効能が網羅されているのに吉宗は大変驚きます。ところが、それは漢文と朝鮮の固有語がハングルで書かれていたため、正体がよくわかりませんでした。そこで当時の第一の知識人と思われていた大学頭の林鳳岡に解説を命じたのですが、朝鮮通信使に学識不足を指摘されたこともある鳳岡は全く答えられず、対馬に調査命令を出しても全て失敗に終わってしまいます。



倭館が作成した報告絵図。克明に描かれた図から、これが今では絶滅したカムリツクシガモの雄であることが判明した。

吉宗の命令

そこで吉宗が白羽の矢を立てたのが、奥医師の林良喜という25歳の青年でした。林良喜は吉宗の母親の縁続きで、彼女の江戸城入りのときに呼ばれて奥医師になる若き薬学の秀才です。

まず、朝鮮通信使が来日したときに医事問答を林にやらせ、『東医宝鑑』の薬について尋ねます。しかし、同定行為が行われていないことと、朝鮮の医師が生きた状態の草木を知らなかったため、問答はかみあわず見事に失敗してしまいます。

仕方がないので現地に調査団を派遣することになりました。1721年に林良喜は178種類に及ぶ項目の朝鮮薬材調査を対馬藩宗家に命じます。その方法は、薬材の現物を入手するか、それができなければ絵図を提出せよ、漢字が同じでも物が同じとは限らず誤解を生むから、文字での問いかけは決してしてはならない、というものです。この調査は吉宗が亡くなった年に終了命令が出るまで、その後30年以上続けられます。

その陰で、人參の生きた根をもってこい、という吉宗の極秘命令が出ます。林良喜が対馬藩に命じ、1721年10月末に現物が届きます。この後も吉宗からの命令が続き、苗や種が対馬から送り届けさせられることになります。

倭館における薬材調査

以上のことから倭館の薬材調査には表と裏の二通りのルートがあったと考えられます。

一つのルートは、朝鮮の国家と外交交渉をして許可をもらった公的ルートです。これは訳官（通訳官）が中心になっているので、私はこれを「訳官ルート」と呼んでいます。朝鮮の調査の主任は差備官（通訳官）の李碩麟で、1721年8月末に任命されて活躍しま

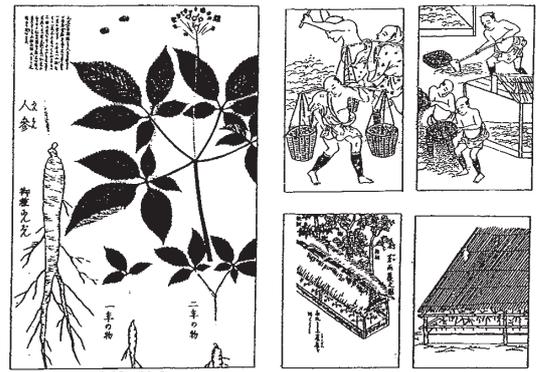
す。李碩麟は植物や動物の現物を朝鮮の各地から入手し、現物を送れないものについては克明な報告絵図を作成し、倭館を通してそれらの資料を日本に送っています。

一方、並行して動いていた裏ルートの主任は金子九右衛門という貿易商人ですが、彼はさまざまにつかから薬材を買い集め、こちらの方から収穫が上がっていきます。その日付と合わせると、江戸城に届いた人參の生きた根3本は、この裏ルートで倭館に入ってきたのではないかと思います。薬材調査の報告書は8月初めが1回目で、2回目は9月初めの日付ですが、訳官ルートは8月末に任命されており、その時点で報告書を書けるはずがありません。ですから、先に届いていたのは裏ルートの報告だったことがわかります。

このように対馬藩は薬材調査を成し遂げ、かつ朝鮮人參の生きた根や種を仕入れてくることになります。もちろんこれは対馬藩にとって不利なことで、将軍が苗や種を手にしたところで、今までも栽培が成功したことがなく、絶対に日本で国産化できるわけがない、と宗家側が考えていたふしがあります。ところが、吉宗はあきらめませんでした。

調査の成果

この調査は、本草学者の丹羽正伯に引き継がれていくことになります。林良喜は調査を始めてまもなく27歳で亡くなってしまい、曲折を経て丹羽正伯が吉宗の命令で引き継ぎます。丹羽正伯は吉宗が民間から試験で採用した人物で、1732年に吉宗から『庶物類纂』という本の編纂事業と、朝鮮薬材調査が命じられます。『庶物類纂』とは、国内外のあらゆる物を網羅した博物学



お種人參の栽培（田村藍水『人參耕作記』）

史上不朽の大著といわれ、1054巻という大変膨大なものです。この時から薬材調査はさらに徹底したものとなります。丹羽正伯は朝鮮薬材調査の手法を日本の産物調査に応用し、全国から書き上げられてきた「諸国産物帳」を基に、1738年に『庶物類纂』の続編が完成し、やがて朝鮮薬材調査の成果も全てミックスして47年に増補版が完成します。

そして、その背後で「お種人參」の栽培が進みます。1721年に江戸城に届いた人參の生根は、日光の御薬園で栽培に成功し、後に佐渡でも株を増やします。その種が増えたところで、人參耕作法を各大名家に渡し、栽培させます。そして高地で朝鮮と気候風土の似ている場所で栽培に成功していきます。将軍自らが種を与えて大名に栽培を奨励したということで、この人參を「お種人參」といいます。

調査の成果は対馬藩の予想とは全く違う方向にいくことになります。「お種人參」の大成功によって、人參の国産化の道が開かれます。幕末の開国時の日本の三大輸出品は、生糸とお茶と人參でした。本場の中国・朝鮮産に負けない人參の品質によって国際競争に打ち勝ち、輸入代替に成功します。物の輸入には貴重な資産が日本から外に出るわけですが、結果的に吉宗はそれを防いでいきます。進んだ朝鮮の医薬を我が物にしたいがために始まった吉宗の施策は、最後にはそれを日本の宝物にしてしまったことが、薬材調査の中から見てとることができます。

「邑治」とは

この研究テーマに関してよく聞かれる質問の一つが「邑治って何ですか？」であろう。邑治という言葉は、日本人だけではなく一般の韓国人にとってもあまりなじみのない表現の一つである。しかし、「邑内」と似たような意味であるというと、田舎の中心地として理解される。筆者が留学生として来日して研究室ではじめて自己紹介し、修士論文のテーマであった植民地時代における「邑城」の変化に関して話した時も同じ反応があった。「邑城って何？」邑治・邑内・邑城、これらについて韓国人はなんとなく知っているが、それが何かうまく説明できない。

ところが、百年も前に日本の陸軍参謀本部が朝鮮半島での偵察調査をまとめた『朝鮮地誌略（1888）』で邑治のことを分かりやすく説明している。

「邑治ハ州府郡縣ノ治所即チ郡守縣令ノ居ル所ナリ」

即ち、邑治とは朝鮮王朝における地方郡県を治める政治的拠点のことで、官庁が集中したところを意味する。学術的には韓国における地方都市の原型として理解されている。

その歴史からもう少し紹介すると、邑治は14世紀末高麗王朝を倒して新たに朝鮮王朝を建てた政治勢力が、中央集権体制を築くために地方統治の拠点として整備したものである。その後、15世紀に政治的安定期に入り、地域や行政的地位などに関係なく、儒教的秩序体系に従って同一の施設が設置された普遍的な都市類型として成立する。この時期に全国に分布した邑治は約330カ所であり、それは1910年に朝鮮王朝が滅びるまで大きな変化なく維持された。王朝が続いた約500年間、邑治は戦争など多大な社会的変化に応じた変容を見せながらも、基本的な秩序体系

を守りつつ周辺の郷村部を支配する政治的拠点としての都市機能を保持してきた。

それでは邑城とは何か。邑城とは邑治を囲んで築いた城郭のことで、倭寇などの侵奪が多かった海岸や国境地域に集中的に分布していた。そして邑内とは、邑治と同じ意味を持つ一般的な言葉であっ

たが、植民地支配期を通じて急激に拡大する都市とは異なる後進的な集落として扱われ、田舎の中心地を意味する言葉として認識されるようになった。それに比べて邑治はより公的な意味が強く、また田舎の中心地という現在の認識による誤解を防ぐためにも使い分けが必要であろう。

新たな都市文化の移植

1876年、朝鮮王朝と日本は「江華島条約（日朝修好条規）」を調印し、同年釜山に開港場を設置した。これによって、約500年間保持されてきた伝統的都市類型の邑治に変化が起きはじめる。開港場には計画された道路や街路灯、下水施設など、今まで朝鮮半島にはなかった新たな都市文化が植えつけられた。しかしその立地を見ると、邑治から離れたところに点として位置している。そのために大きな変化ではなかったものの、まだ内陸へ及ぼす影響力はそれほど強くなかった。

それを変えたのが鉄道である。鉄道は、開港場と朝鮮半島の中心「漢城（現ソウル）」をつなぐ線として建設された。この線によってようやく新たな都市文化は内陸に向かって運ばれるようになり、朝鮮半島の都市空間を変えていく。

筆者は都市史を研究する立場から朝鮮半島に建設された鉄道を見る際、次のことに注目している。まず、建設されたほとんどの鉄道が朝鮮自らの意思や計画によるものではなく、他者である日本によってつくられたことである。2004年現在韓国と北朝鮮を合わせた鉄道総延長8,609kmのうち75%が日本によって建設されたものである。そ



韓国全羅南道にある樂安邑城の航空写真

れほど戦前の鉄道建設において日本の影響は絶対的である。

もう一つ、日本は韓国を植民地化する以前から大陸へ進出するための道具として、朝鮮半島を縦貫するかたちで京釜線（1904）と京義線（1906）を建設した。そして朝鮮を植民地化した後には植民地の鉱物と農産物などを運ぶために京元線（1914）や湖南線（1914）などを次々と建設した。このように朝鮮と日本の外交・政治的關係の変化に伴って建設する鉄道の目的は変わっていた。

そこで建設主体を「日本」という一語でまとめずに、激しく動いていた日韓關係による建設目的の変化と鉄道路線や停車場の立地の關係を分析する作業が何よりも重要となる。それをもとに他者による鉄道建設が邑治という伝統的な都市空間の再編にどのような形でかかわっていたのかを解明することがこの研究が目指す目的である。

「鉄道」が変えたもの

そもそも邑治において移動性、つまり交通はあまり重要な条件ではなかった。むしろ風水地理説などの影響もあり、外部からの接近をある程度遮断してくれるところをより良い居住地として認識していた。しかし、18世紀以降交通の要地が都市を繁栄させるための立地として注目されるようになった。それは軍事的な防衛体制の変化と商業活動の活発化などに起因する居住地に対する認識の変化の結果であった。政治的に周辺を治める拠点であった邑治以外に交通要地を中心に商業的拠点が成長し、場合によって邑治と一致したり、あるいはまったく異なる地に根を

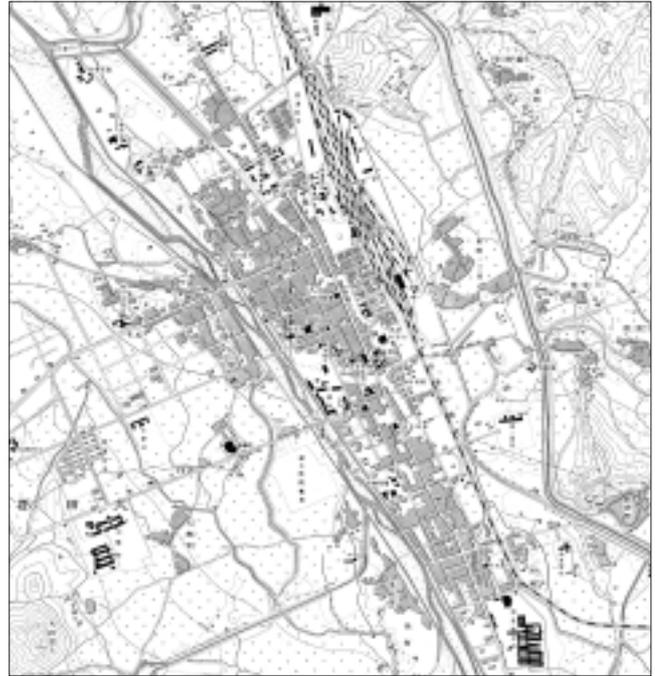
下ろしたりしながら新たな都市システムを構築した。

そのような変化が本格的に起きてから1世紀後に、既存の交通体系とはまったく異なる新たな交通システムとして鉄道が入ってきた。鉄道の建設は単に邑治または都市を変えただけではなく、今まで存在していた地域ネットワークと

しての都市システムを完全に変えるものであった。

朝鮮半島に建設された鉄道は都市システムとの關係においてその出発から重大な問題を内包していた。朝鮮半島を南北に縦貫する最も中心をなしている幹線鉄道が既存の都市システムなどよりは日本の戦争の備えとして、そして朝鮮での既得権をより強化するために計画・建設されたからである。その結果、既存の都市システムの中で中心的な役割を果たしていた邑治が排除されてしまい、その代わりに新たな鉄道都市が生まれ、新たな拠点都市として急成長し、まったく別の都市システムへと変わった。その影響は現在の都市システムにもそのまま残っており、「広域市」という韓国における大都市のほとんどはその時に形成された都市システムの結果ともいえるものである。

即ち、植民地支配期までに建設された鉄道によって邑治で起きた変化を解



鉄道建設が都市の起源となった「大田」の地図（1917）

明することは単に過去の歴史を明らかにし評価する以上の意味を持つ。それは現在につながる韓国の伝統的な都市空間の連続性に関する知見を提供すると共に、韓国の都市近代化における日本の影響及び実状の把握、そして、今後の都市開発において歴史性を生かした計画を樹立する上で理論的根拠を提供してくれるはずであるからである。

PROFILE

キム ホンギョ



東京大学大学院工学系研究科修了。工学博士。2007年4月から2008年2月までフェローとして東京大学生産技術研究所で研究活動を行っている。専門は都市・建築史で、現在は韓国の伝統的な都市類型である「邑治」をテーマとして歴史的研究を行っている。

韓日バイカモ保全青少年環境探検隊交流事業

NPO法人 グラウンドワーク三島事務局長 渡辺豊博

ミシマバイカモを復活

グラウンドワーク三島（静岡県）では、1998年より水辺環境の悪化により市内から姿を消した水中花「三島梅花藻（ミシマバイカモ）」の保護育成の活動を進めてきており、現在では、その増殖育成技術が確立され、一年中白く可憐な花が咲き乱れている。また、増殖したミシマバイカモは環境改善された市内の川や湧水池に移植され、「水の都・三島」の原風景が復活し始めている。

2004年5月には、韓国江華島において絶滅危惧植物に指定されているバイカモの保護活動を進めている「韓国ナショナルトラスト江華島バイカモ保護委員会」と環境交流協定を締結した。

さらに、2007年2月には、国内でバイカモの保護に取り組む環境団体と韓国ナショナルトラストメンバーとが「バイカモ国際サミット」を開催して国内外にわたるバイカモ保全ネットワークを構築することを決議した。

今回の交流事業は、「韓日バイカモ保全青少年環境探検隊」を結成して両国の相互交流を図り、青少年たちに「環境のバロメーター」と呼ばれるバイカモの保護育成活動を体験してもらうとともに、貴重種と環境を大切にす文化・歴史の相互理解の形成につな

げていくものである。

韓国江華島のバイカモ

まず、2007年8月に2泊3日の行程で江華島を訪ねた。参加者は、三島市内の小学生を対象として公募を行い、6年生2人・5年生4人・4年生2人の8人を選抜した。応募の動機としては、近くて遠い韓国の文化・歴史への好奇心や、日頃親子で参加しているミシマバイカモ育成のボランティア活動を通しての関心、韓国のバイカモなど動植物の環境保護・保全についての市民の関わり方などへの関心が挙がっていた。

江華島は、ソウルから北西40キロにあり、美しい海岸と水田地帯が連なり、歴史的な遺跡も多い。江華島のバイカモは、水田の中で3月から5月までの3カ月間しか生育できないが、昔は「白い海」と呼ばれたように、海岸線の水田地帯に咲き乱れていた。しかし近年、工場立地や宅地開発によって多くの水田が埋め立てられ、さらに、化学肥料や農薬使用の拡大による水質悪化も進行し、地域環境の変化によって絶滅の危機が迫り、この保護地にある観察・増殖施設がバイカモの保護育成に重要な役割を担っている。



「韓日バイカモ保全青少年環境探検隊交流事業」参加者

らの湧水のおかげで一年中バイカモが咲いている。湧水の素晴らしさと環境の大切さが改めて理解できた、「自然環境を壊すことは簡単だが、保護・再生することの難しさが分かった」と言っていた。また、2日間にわたる市民ボランティア宅での宿泊体験は、当初、言葉や食生活への不安があったようだが、じゃんけん遊びなどですぐにうち解け、言葉の壁をこえての「友達の輪」が広がったようである。

年内には、今度は韓国の8人の小学生が三島を訪れ、ホームステイなどで交流する。三島のバイカモ育成の仕組みと水辺自然環境の素晴らしさを体験してもらい、今後とも相互交流の機会を活発化させていきたいと意気込んでいる。

バイカモ保護の重要性を実感

訪問した子どもたちは、時期的に実際のバイカモが見えず残念がってはいたが、貴重な植物を保護育成していくための様々な苦勞や工夫を、現地の子どもたちや植物学者・農業者から、直接聞き取ることができ、三島の環境との違いを理解できたと喜んでいました。

子どもたちは、「三島では富士山か



湿地での自然観察

NPO法人グラウンドワーク三島

「水の都・三島」の水辺自然環境の改善・再生を目的として、1992年に設立された。「右手にスコップ・左手に缶ビール」を合言葉に、40箇所にわたる実践活動を展開。現在、20の市民団体や行政、企業が参加している。

わたなべ とよひろ

設立より16年間にわたり、NPO法人グラウンドワーク三島の事務局長を担当し、バイカモの保護活動に取り組む。



15回目を迎えた日韓歴史教育交流会in名古屋

日韓教育実践研究会事務局長 遠藤茂

日韓の教師による 実践報告と交流

日韓教育実践研究会は、日韓の教育現場で日々教育実践を進めている教師たちの交流を目的に、1993年に発足しました。普段の活動は日韓の問題や歴史の課題だけでなく、アジアを視野に入れた問題も研究し、歴史、地理、公民、道徳、国語、総合的な学習などを対象領域としてきました。また、毎月1回の研究会を行い、ニュースも発行しています。会員が小学校の教師から大学の教員までいるために、歴史に絞らずに教育の課題を研究対象としてきたという背景もあります。

さて、去る8月8日に名古屋で開催された交流シンポジウムは、小学校分科会、中高校分科会、高校生交流会の3つに分かれて交流しました。その様子をお伝えしながら、日韓の教育現場の教師が抱えている問題点を紹介したいと思います。

韓国「学級崩壊」の衝撃

小学校分科会では、3本のレポートが報告されました。韓国からは「韓国の小学生の現状と教育実践」（6年）、日本からは「もっと知りたくなった韓国・朝鮮」（3年）と「どの子どもも参加する授業をめざして」（6年）の2本です。



中高校分科会での討議の様子

中高校分科会での報告は、韓国からは「6月抗争・1987年大統領直接選挙制への改憲を導き出した韓国民主主義運動史の視点より」（高校）、日本からは「歴史教育を積み上げて韓国修学旅行へ」（中学）と「日韓条約を中学生と考える」（中学）の3本でした。

高校生交流会は、7回目を迎えることができました。初めの頃は歴史問題をテーマにしたりしましたが、近年は高校生の企画運営に任せて、自分たちが身近に感じている課題をテーマに交流を進める方向になってきました。とはいえ、今後はやはり両国に共通する課題を話し合うことも必要ではないかと考えています。

特筆すべきは多くの参加者に衝撃を与えた小学校分科会での韓国側の報告でした。それは学級崩壊と呼んでいいような内容だったからです。日本で起こっている学級崩壊と同じで、参加した教師たちにとっては身につまされる内容だったと思います。日本側参加者の1人は、自分の教室の学級崩壊状態を吐露しつつ、深く共感していました。

子どもたちの生活の場である家庭がすでに経済的に逼迫しています。所得の低い世帯が多い地域にある学校では、学力的にも低く、いじめが頻発し、言葉遣いも荒々しい傾向にあり、教師のコントロールが効かない状態になっているのです。その上、保護者の意識は成績を上げることにしか向かず、教師への反発も強いという話でした。しかし、こうした状況は特殊なことではなく、韓国の多くの地域に共通する問題だと、韓国の小学校の教師たちは語っていました。背景には韓国国内での所得格差がありますが、他方では教育への出費が日本に比べても大変に高額だということがあげられます。保護者の



シンポジウム後に行われた日本コリアフォーラムの様子

所得の約60%が教育費だというのです。所得の高い世帯と低い世帯ではあらゆる面で差が生じます。社会での格差が子どもたちにどのような形で現れるかを提示した報告でした。

子どもの生活を見る視点を 共有し、問題解決へ

しばらく前に韓国社会で日本のいじめが話題になりましたが、その時韓国では、「いじめは日本に特有の現象だ」と言われていました。ところが、子どもの生活にゆとりがなくなってくると、いじめが現れるというのはどの国でも共通しているのです。むしろ韓国のいじめの方が近年深刻になりつつあるようです。日韓の教師たちは、子どもの生活を見つめ、いじめの原因となっているものに立ち向かっていくためにも、交流を深め子どもの生活を見る視点を相互に共有し、解決の糸口や方向性を探っていきたいと考えています。

PROFILE

えんどう しげる



現在千葉県船橋市で小学校教員をしている。日韓教育実践研究会事務局長になりすでに10年を超えているが、毎年シンポジウムを開催するため報告者をさがしたり、旅行団を組織したり忙しい毎日である。

所かわれば、餅もかわる

日本が新年を迎える1月1日。静かな朝は雑煮で始まる。雑煮に入れる餅は東日本では角餅、西日本では丸餅と異なるそうだが、これが海を渡って韓国にまでたどりつくと、不思議なことに楕円となる。小判型、銭型とも称される薄切りのピラピラした餅は、糯米ではなく、うるち米を使って作るのが大きな特徴。棒状に成形した餅をななめに切って使うため、仕上がりが楕円形になる。一切れが小さいので、1人前にはその餅が何枚も入る。

この韓国式の雑煮を「トックク」と呼び、韓国でも正月の代表料理として食べられている。日本でも韓国でも正月に雑煮を食べるとするのは、隣国ならではの共通点だろうが、細部に目をやると微妙に違うのが面白い。

そもそも、その雑煮を食べる日も違う。日本では陽暦で正月を祝うが、韓国では陰暦で祝うのが習慣となっている。陽暦の1月1日は新正月という祝日ではあるものの、会社も学校も休みはその1日だけで、その前後はただの平日。旧正月こそが真の正月であり、2008年の場合は陽暦の2月7日が元日となる。

その前後を含む3日間が韓国では正月連休となり、多くの人たちが実家に帰って家族や親戚と過ごす。懐かしい顔に挨拶をする日でもあるが、親戚一



正月の祭祀膳

同が集まってご先祖様をおまつりして「祭祀(チェサ)」を行う日でもあるのだ。

祭祀膳に捧げられるご馳走は、日本の雑煮と同様に多様な地域差を含んでいる。ごはん、汁、ジョン(野菜や白身魚の衣焼き)、魚の干物、餅、果物などはどの地域でも定番だが、そこにサメの切り身が加わったり、タコの干物が加わったり、地域ごとにこれを欠かしてはならないという食材が必ずある。用意された料理はテーブルの上にずらりと並べられ、集まった子孫たちはその前にひざまずいて「クンジョル」と呼ばれる最上級のお辞儀をする。祖先に感謝をしつつ、新年も無事に過ごせるようお祈りするのだ。

唐辛子を使わない韓国料理

祭祀が済むと、供えた料理はそのまま正月料理となる。亡くなられたご先祖様と同じものを食べるというのは、ご先祖様の福を授かる神人共食の儀式であり、これを韓国語では「飲福(ウムボク)」と呼ぶ。面白いのはこれらの料理に唐辛子をまったく使わないこと。これは陰陽五行説に則った考え方で、陽の力を持つとされる唐辛子が、霊的存在であり陰の力を持つご先祖様と反発してしまうとの理由からだ。唐辛子を使った刺激的な味わいが韓国料理の持ち味だが、1年の始まりには唐辛子の入らない穏やかな料理を食べている。

当然のごとくトッククにも唐辛子は使われない。牛の胸肉(ブリスケ)、鶏肉、貝などであっさりとしたスープを取り、塩、醤油で味付ける。具も溶き卵や長ネギ、海苔などが一般的だが、



トックク



チョレンイトックク

マンドゥと呼ばれる餃子を加えることもある。正月だけでなく、日常的にも親しまれている料理なので、町中の食堂に行くと1年中食べることができ。旅行客にとっては朝食、昼食にぴったりの料理でもある。

余談だが、東日本、西日本、韓国と渡ったその先、北朝鮮の開城(ケソン)という地域に行くと、さらに餅の形状が変わって雪だるま型となる。同じうるち米から作った餅を、小指の先ほどの団子状にまとめ、それを2つつなげて雑煮に入れるのだ。なんとも愛らしい形をした雑煮で、この料理をチョレンイトッククと呼ぶ。ソウルでも食べられる店は少ないが、北朝鮮式の料理を出す店に行くと稀に見かける。

ただし、その愛らしい姿とは裏腹に、雪だるま状の形にはちょっとした由来がある。正月のめでたさにはふさわしくない話題なので、欄外にでもこそっと書き記しておくとしようか。

※開城は高麗時代の都だったが、朝鮮王朝を開いた李成桂に打ち倒されて滅びた。一説によるとチョレンイトッククは開城の人たちが、その恨みを餅に込めて作った料理。雪だるまに見立てたのは李成桂の首で、プチンと噛み切って悔しさを紛らわせたのだとか。

PROFILE

はった やすし



コリアン・フード・コラムニスト。1999年より韓国に留学し、韓国料理の魅力にどっぷりとハマる。著書に『魅力探求！韓国料理』(小学館)など。日々、食べている韓国料理を日記形式で紹介するブログ「韓食日記」も運営中。

日韓文化交流基金事業報告

第7回日韓歴史家会議

11月16～18日に韓国・ロッテホテルソウルで第7回日韓歴史家会議が開催されました。16日の記念講演会「歴史家の誕生」では、和田春樹東京大学名誉教授と金容燮延世大学校名誉教授から、自らの生い立ちと学問的遍歴について紹介がありました。17日と18日の2日間にわたって開かれた会議では、「反乱か？革命か？」のタイトルのもと、日本史、韓国史、中国史分野の発表が行われ、両国の幅広い分野の歴史研究者によって討論が繰り広げられました。

なお、この会議の詳しい内容は次号でお伝えします。



学術定期刊行物助成



『韓国朝鮮の文化と社会 6』
韓国・朝鮮文化研究会編、風響社

報告書

以下の報告書が完成しました。

- 日本教員訪韓研修団＜第1団＞
(2007年6月5日～6月14日) 報告書
 - 日本教員訪韓研修団＜第2団＞
(2007年6月26日～7月5日) 報告書
- *本報告書は基金図書センターにて閲覧が可能です。

訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	訪問校
韓国教員 (第3団)	呉幸子 ソウル特別市教育庁 奨学士	20	7	13	10/23-11/1	都立城南養護学校、横浜市立中村小学校、 札幌市立北光小学校
韓国教員 (第4団)	趙美玉 蔚山広域市教育庁 奨学士	20	10	10	10/23-11/1	都立美原高等学校、横浜市立富士見中学校、 新潟市立葛塚中学校
韓国大学生 (第1団)	黄仁泰 忠南大学校英語英文学科 教授	20	12	8	11/6-11/15	青山学院大学、四国学院大学
韓国大学生 (第2団)	金漢坤 嶺南大学校社会学科 教授	20	7	13	11/6-11/15	武蔵工業大学、東北大学
韓国大学生 (外務省招聘)	張恩璟 外交通商部文化協力課 事務官	28	19	9	11/13-11/22	慶應義塾大学、大阪大学
韓国大学生 (第3団)	李丁宰 慶熙大学校国語国文学科 副教授	20	8	12	11/27-12/6	恵泉女学園大学、宮崎公立大学
韓国大学生 (第4団)	全亨式 高麗大学校日語日文学科 副教授	20	14	6	11/27-12/6	千葉大学、会津大学

訪韓団

団体名	団長	計	男	女	期間	訪問校
日本大学生 (外交通商部招聘)	余田幸夫 外務省北東アジア課 地域調整官	30	11	19	10/30-11/8	慶熙大学校、東西大学校 (釜山)

中高生訪日団

団体名	団 長	計*1	男*2	女*2	期 間	訪問校
韓国中学生 (第3団)	文苗淳 京院中学校 校長	54	20	30	9/10-9/16	紀の川市立打田中学校
韓国中学生 (第4団)	朴貞淑 新道林中学校 校長	54	20	30	9/10-9/16	有田市立保田小・中学校
韓国高校生 (第5団)	李漢準 盤浦高等学校 校長	53	17	32	10/2-10/8	福岡県立玄洋高等学校
韓国高校生 (第6団)	宋順子 紫雲高等学校 校長	55	20	31	10/30-11/5	福岡県立福岡工業高等学校
韓国高校生 (第7団)	崔基淑 紫陽高等学校 校長	54	22	28	11/19-11/25	大阪府立芥川高等学校
韓国高校生 (第8団)	金顯中 三聖高等学校 校長	54	23	27	11/19-11/25	大阪府立狭山高等学校

*1 引率含む *2 生徒のみ

中高生訪韓団

団体名	団 長	計*1	男*2	女*2	期 間	訪問校
岐阜県中学生	田中敏雄 高山市立東山中学校 教頭	54	25	25	9/17-9/23	中平中学校 (ソウル)
千葉県中学生	藤平一雄 千葉県教育庁教育振興部 次長	52	23	25	10/8-10/14	可楽中学校 (ソウル)
和歌山県高校生	熱川恒弘 和歌山県教育庁県立学校課 課長	56	15	34	10/22-10/28	盤浦高等学校 (ソウル)
神奈川県高校生	下山田伸一郎 神奈川県教育委員会 学校教育担当部長	54	11	39	11/19-11/25	紫雲高等学校 (ソウル)

*1 引率含む *2 生徒のみ

維持会員制度ご加入状況

2007年9月1日～11月30日の期間に、20名の方に維持会員制度にご加入いただき、26万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

個人会員 19名

饗庭孝典	伊集院明夫	猪俣道也	今枝敬雄	小此木政夫	木畑洋一
権俸基	栗田伸一	佐々木武夫	徐賢燮	徐龍達	谷浦孝雄
中山めぐみ	邊恩田	松田利彦	水谷啓子	山口晃	尹勇吉

匿名希望 1名

特別会員 1名

広島県日韓親善協会

平成20(2008)年度 公募プログラム案内

人物交流助成 申請受付

2008年度(2008年4月～2009年3月)の人物交流助成の申請は、2008年1月4日から2月1日まで受け付けます。

学術定期刊行物助成 申請受付

2008年度(2008年4月～2009年3月)の学術定期刊行物助成の申請期間は、2008年2月18日から2月29日まで受け付けます。

※人物交流助成、学術定期刊行物助成とも、年1回の募集となります。詳しくは募集要項をご覧ください。募集要項・申請書は当基金ウェブサイト<http://www.jkcf.or.jp>からダウンロードできますので、どうぞご利用ください。